りびんぐらいぶず断章 平成26(2014)年2月第1号

お通夜の御法話から

◆はじめに

おつやの御法座は、予期せぬ訃報を耳にして取るものも取りあえず駆けつけて故人と共にお勤めする最後のお夕事であります。

〇〇さんは、昨日の朝早くお亡くなりになりました。お知らせを受けて枕経にお参りましたところ、喪主様から「葬儀はごくごく近親者の間で執り行いたいので皆様にお知らせになりませんように」と重一い宿題を頂戴したのであります。

午後は、丁度仏教婦人会の新年会でありました。

ですのでもしも、〇〇さんがお元気でいらっしゃったならば、ご一緒にご尊前で新年のお慶びを申し上げ、如来様のお慈悲を御法話で親しくお聞かせに与っている筈でありました。それが叶わなかったことは悲しいことでありました。

ところでどうでしょう。佛婦会員の皆様は、既にもれなく〇〇さんの訃報を耳にしていらっしゃいましたよ。そりゃ、五人組にご連絡になれば、その途端に村中にニュースはかけめぐります。

お陰様で、今生には命のおわりのあることをご自身の問題としてお聞き留めになり、いつになく厳粛な新年会となったことをまずお伝えしたいと想います。

〇〇さんの早速の**還相回向**（げんそうえこう）のお働きでありお礼申さねばなりません。

お通夜のお勤めのお導師は、お亡くなりになったそのお方であります。

お勤めは「**お正信偈**（しょうしんげ）」です。「お正信偈」というのは、親鸞聖人が畢生（ひっせい）の大著「顕浄土真実教行証文類（けんじょうどしんじつきょうぎょうしょうもんるい）」の行巻に顕された百二十句の偈文（げもん）です。

本願寺第八代蓮如上人が朝夕の御門徒さんのお勤めの次第としてお定め下さり、爾来、五百年の間、御門徒さんのお家で営まれてきたお勤めです。

阿弥陀如来のご本願が成就して仕上って下さった南無阿弥陀仏のお名号のお謂われを仰せの通りにお聞かせに与れば、その瞬間、煩悩具足の泥の凡夫が一人の例外もなく、如来様のお慈悲の懐に包まれるというみ教えです。

如来様が願っていて下さるのですから、さようならばと私の頭が垂れるとき、摂めとって決して捨てない如来様の**摂取不捨**（せっしゅふしゃ）の利益に遇わせて戴くのです。

如来様の仰せに首肯して頭が垂れることを浄土真宗では**信心**と申しますが、その信心一つによって如来様の懐に抱かれ、やがて今生の命終わるそのとき、直ちに如来様のお膝元、お浄土に迎え取って戴くのであります。

今生の命が終わるその一刹那（いっせつな）如来様のお国に生まれさせて戴くのです。

ですから、私たちは習慣上、「お亡くなりになった」とは申しますが、決して死ぬのではありません。死ぬのでは無く、生き通しの命のふるさと、阿弥陀如来のお浄土に逝き生まれるのであります。阿弥陀如来のご本願のお力によって。

それでは、お手許にお配り致しました一文を頂戴することに致しましょう。

◆私がお浄土に生まれるとき

長いようで短かったこの世のお勤めが終って、母はお浄土に旅だった。
お浄土は、如来様のいのちのふるさと、そのふるさとに母は誕生したのだ。
だから、私の姿を見ることができないとただ悲しんで欲しくはない。
それじゃ、折角の私の浄土往生を邪魔するだけだからだ。
嘗て、お前たちが誕生したとき、私はお前たちをかいなに抱いて喜んだ。
その私が、たった今し方、如来様のふところに抱かれる身となった。
だから、私が去って行ったとただささびしげな挽歌は歌って欲しくはない。
それじゃ、私たちの初めての語り合いにふさわしくないからだ。
私のためには　このような言葉は言って欲しくはない。
母のいのちの灯（ともしび）は消え、去って行ったと
そうではなく、私のためには、ただこう言って欲しい。
母は、如来様の大悲の願船の船人として十方世界に赴くお役に就いたのだと。
それでもふと、別れの涙があふれたら
そっと、今日の日をそのままメモリアル(記憶)に刻んで欲しい。
私を惜しむことなく、共に過ごした日々をよろこんで欲しい。
互いに顔を合わせていた日のお前達の声そのままに、こんな風に言って欲しい
「香り高い素敵な船旅を」と
お前の人生で、もしも不安げな嘆息が漏れるときは、そっと、私の名を呼んで欲しい。
「南無阿弥陀仏、お母さん」と
その瞬間、私はもうすぐお前たちのそばに居て、
共に過ごした頃の元気な声そのままにこんな風に言うとしよう
「私はここにいるよ、一人じゃないよ」と

◆簡要は御文章から

大聖釈尊（だいしょうしゃくそん）章又は白骨の御文章拝読(記載略)

それでは、皆様、最後はお念仏してお通夜の御法座を閉じることに致しましょう。

お持ち下さったお念珠に両の手を合わせて大きなお声でご一緒に十編程お念仏申しましょう。

お念仏は、南無阿弥陀仏と称える行いです。如来様が「さあ、称えてご覧」とお勧め

下さっているのですから、如来様の願いの通りに称えますというと直ちに聞こえて下さるものがあります。

南無阿弥陀仏と聞こえて下さるのです。聞こえて下さった南無阿弥陀仏こそは、たった今し方お浄土を発し、わが両の耳を揺るがせ、わが胸底に響いて下さる如来様じきじきのお喚び声だったのです。

どうぞとくとお聞き留め下さいませよ。

それではご一緒にお念仏申しましょう。なんまんだーぶ、なんまんだーぶ、なんまんだーぶ・・・合掌。

（後書き）肉親の今生での最後の言葉が、私をお浄土に誘う最初の語りかけとなる。

だから、肉親の死をただ悲しんでいてはいけない。

むしろ、この日を機縁として、嘗て見ることも聞くことさえも叶わなかった大きないのちの世界に目を開かれることを喜ぶべきである。

肉親はなぜ旅立ったか、

それは、私達に生き通しのいのち「無量寿」の世界を教える「もっと大きな愛の実現の為」だったからである。

逝いた肉親は、今や南無阿弥陀如来の**本願の名号**と一体となり、お喚（よ）び声となって、私を喚び覚ましつつ浄土より直ちに十方世界に働き出して下さっている。

それ故、私達もまたその働きに遇い、南無阿弥陀仏とみ名を呼び、直ちに聞こえて下さる六字のお喚び声に喚び覚まされつつ、残された今生の旅路を辿ることこそ大切となるのである。合掌。

◆正覚寺ご法話会（お聴聞の会）（毎月第一日曜日開催）　二月は二日(日)二十時より

自由な質疑応答が花開く布教使様とお同行の皆様と住職とで作る御聴聞の会です。

お同行の皆さんはお聴聞を通して、布教使は御法話と質疑応答で布教力量を鍛え上げられ、住職は突きつけられた厳しい課題と真っ正面から取り組むことによって、共々にお聴聞に遇わせて戴く類希な営みです。

斯かるお聴聞の現場を通して鍛え上げられたロジックがやがて現代伝道教学として花開き、逐次機関誌「りびんぐらいぶず」を介して世に問わせて戴き、宗派宗門への積極果敢なご提案として実を結んで参ります。

世の大先輩の皆様方にはどうぞ遅滞なく忌憚なきご指導をお願い申し上げます。

◆仏教婦人会例会　二月十六日（日）十九時より

◆正覚寺永代経　　二月二十三日(日)十九時半より

どなたさまもお誘い合わせてお参り下さい。

著作編集兼発行元（本願寺派 正覚寺内）　〒520-0501 大津市北小松四五二番地

電話 077-596-0166、Fax077-596-0196 住職　堅田 玄宥